

編集後記

■東海関西学生グライダー競技会と全日本学生グライダー競技大会は数少ない公式戦である。

出場が決まった選手が最初にするのは、出場した先輩の経験と失敗から学ぶことであろう。そのために、翔友に掲載された過去の「競技会レポート」を熟読して少しでも情報を得、イメージを掴もうとすると聞く。正に初めての道を行く者に方向を指し示してくれるコンパスであろう。

そのコンパスが今年は欠落した。レポートの提出が無かったからである。部を代表しての出場に際しては、陸送や期間中のクルーとして下級生の支援を受け、また翔友会からは経費の援助も受けている。であれば、その責任と義務を果たさなくてはなるまい。責任は成績であるが、全力を尽くせばその結果は問われない。ところが義務はそうではない。後に続く者のために、自分が経験したこと、得た知識、失敗したことを詳細に書き残す行為以外に果たす手段は無い。最近、指導スタッフから「まともな部活が出来ない学生が多い」という嘆き節を聞く。「まさか…」と思っていたが、他の範たるべき選手にしてこの有様では納得せざるを得ない。部員としての責任と義務を良く自覚し、自己犠牲を厭わず、他者への思いやりを忘れない部員を育てないと、低迷を続ける部の再生は難しい。低迷は部員だけのせいではなく、指導した側にもその責任を感じて欲しい。

■監督が交代した。この状況下の打開に向けて、敢えて監督を引き受けられた玉井克典氏の熱意に感謝と敬意を表し、翔友会は挙げて応援しなければならない。

■今年の翔友会総会で、編集長の辞意を申し出た。

思い返せば私のお師匠さん、故牧野鐵五郎先輩の「次から君に任せる」という突然のご指示に、「ハイ!!」という返事以外に否応は無く、かくして本誌の編集を引継いだのは1995年、第X(10)号からであった。もともと、部の創立50周年記念事業の一つとして50年史発行が企画され、牧野先輩のご努力によって編まれたのが「翔友」である。(因みに50周年を機に全OBの消息を調査して再発足の基礎を築いたのは故佐々木 哲幹社長、そしてOB会の名称を“翔友会”と名付けたのは現名誉会長小野 哲先生である)そして50周年記念事業の完結を報告するために、翌年「翔友II」が発行されてその使命は終了するはずであった。ところが、多くのOBから継続を望む声が大きくなり、それではと翔友会の機関紙と現役の部誌を兼ねて年刊として発行を継続することとなった。

爾来24年、唯々先輩の遺産を守り、後世に繋ぐことだけを大切に今年34号を発行した。もとより浅学菲才を顧みず取組んだことだけに、毎号興味深くお読み頂けたかどうか、甚だ心もとないが、部の出来事や状況を地道に一年毎に記録し、積重ねてきたことは、後世の部員やOB達が部の歴史を振り返る時、確実な「証人」としての役目を果たせることだけは間違いない。

私は今年78歳となり、この世を去る日もそんなに遠くはない。そうなってお師匠さんに再会した時、編集内容に関して決してお褒めの言葉は頂けないであろうが、継続したのでお叱りは受けないと思う。それは偏に原稿依頼に応じて下さった皆さんのお陰であり、改めて深く御礼を申し上げる。永年、我慢してお読み頂き感謝に堪えない。これを最後の編集後記として筆を置く。皆さんお元気で。

来年からは幹事会が選んだ新編集長によって発行が継続されるので、お楽しみに。

第10号～第34号編集長 1964年卒 窪田 昌三



翔友 34 〈非売品〉 編集 翔友会

2019 年 6 月 1 日 発行 同志社大学体育会航空部

印刷 同志社大学プリントステーション
